

多文化間アドバイジング・カウンセリングと連携 —共修時代の国際学生支援—

国際教育交流センターアドバイジング部門

田中 京子・高木 ひとみ・酒井 崇
和田 尚子・川平 英里

1. はじめに

国際機構が2016年に設立されてから3年が経ち、アドバイジング部門も活動をより深化させる時期に来ていたが、2018年度はさらなる組織再編に直面することになった。2018年4月に新たな組織「キャリアサポート室」が設置され、3年間部門で担ってきた国際学生のキャリア支援・就職支援が、全学学生のキャリア支援を担う「キャリアサポート室」に引き継がれることになったのである。アドバイジング部門では、過渡期に対応できるよう、キャリアサポート室との連携を密にとりながら、国際学生の進路・キャリア相談体制の充実に努力した。

同時に、2019年度に学内の学生支援組織を一元化して「学生支援センター」が設立されることになり、アドバイジング部門教員は新センターに兼務することになった。新センターの体制整備や、国際機構との関係などについて、部門としても短期間で集中的に検討する必要がある。本学で学生支援の重要性がさらに認識されるようになってきた中、学生の多様化にともなって国際学生支援の重要性も増している。一般学生と留学生の共修を推進しながら多様な学生を一元的に支援することの利点をふまえつつ、国際学生の特殊事情に対応できる専門性の高い支援体制を担保できるような体制作りが必須である。このように大学が財政的に厳しい状況にある中、学生支援の質を確保しながら何をどのように効率化するかを模索しつつ、実践した1年であった。

雇用環境の整備については、なお複数名の教職員が任期付雇用契約で職務にあたり、長期的視野にたった学生支援にとっての課題となっている。この点は支援の現状やその必要性を明示しながら、関係者や関係機関と交渉し調整していきたい。

2. 教育活動

(1) オリエンテーション：情報提供、信頼関係・交流・多文化理解の促進

留学生の渡日前から修了にいたるまでの参加型、交流型、日本語・英語併用オリエンテーションを継続・充実させた。

【渡日前オリエンテーション】

・(日本語研修生、日本語・日本文化研修生対象)

例年と同様、学生交流課および入学予定者の進学先部局担当者と協力して、ウェブ上で渡日前情報と『入学予定者のためのガイドブック』を入手し、読んでもらうよう入学予定者に案内した。

【到着後オリエンテーション】

・全学新入留学生オリエンテーション

春と秋の新学期に、学生支援課が中心となって、国際教育交流センター・国際言語センター関連部門が協力して、オリエンテーションを行った。秋学期は、G30プログラム学生も対象として行った。2016年度から継続して、新入留学生には情報をひとつのファイルにまとめて渡す方法がとられた。準備時間短縮の観点からクリッカーは使用しなかった。

・日本語研修生、日本語・日本文化研修生対象オリエンテーション

研修生の所属は国際言語センターであるが、到着後の区役所登録、学生登録、オリエンテーションにこれまでと同様、部門として協力し、4月と9、10月に数回に分けて行った。

・国際交流会館オリエンテーション

新学期にはそれぞれの会館で、RA〈レジデント・アシスタント〉が主催して新入居者に対するオリエン

テーションを行っており、アドバイジング部門教員はそこに参加し挨拶等を行った。

・NUPACE 生対象オリエンテーション

春と秋の新学期に、国際プログラム部門が主催するオリエンテーションにこれまでと同様、部門として協力し、カルチャーショックや異文化適応について説明を行った。

【交流型オリエンテーション（ワークショップ）】

例年通り、世界の言語、文化を学ぶワークショップを地域のボランティア講師および名古屋大学学生グループの協力のもと行った（本年報「事業報告」中の「留学生の学生生活・市民生活支援事業」を参照）。日本文化紹介のセッションの一部は、ケンブリッジ大学から本学に来た短期交換留学生や、名古屋大学短期日本語プログラム（NUSTEP）参加留学生も対象にして行った。

【引越しオリエンテーション】

国際交流会館を退去して民間アパートなどに引っ越す必要がある留学生たちを対象に、宿舎の選択肢やそれぞれの探し方などを説明するオリエンテーションを、教育交流部門と協力して各学期2回ずつ、日本語と英語に分けて開催した。2017年度に引き続き、連帯保証人制度に関する説明は学生交流課から行った。

【帰国前オリエンテーション】（日本語・日本文化研修生対象）

学生交流課と協力し、プログラムを終えて7月に帰国する研修生に、帰国のための各機関での事務手続き等、帰国後の過ごし方などについて、オリエンテーションを行った。

（2）国際教育交流プログラム

【学生パートナーシッププログラム】

国際交流を希望する学生の登録により、一般学生と留学生を1対1で紹介し自由に交流する「きっかけ」を提供するプログラムである。登録時の面談による聞き取りにおいて、一般学生は交流の目的として語学習得の機会を望むことが多く、2018度は英語と日本語の交換学習目的で3組を組み合わせて、紹介した。すべての登録者には学内外の交流イベントの情報をメールにて提供することで、本プログラムへの興味が交流に

繋がるようにした。

近年は本プログラムへの登録者数が減少し、交流目的が合致する学生のマッチングが難しくなり、また様々な交流の機会が増えて本プログラムのような1対1での紹介の必要性が低くなったこと、さらに名古屋大学留学生会（NUFSA）が言語交換プログラム（TANDEM）を運営し始めたことから、本プログラムは2018年度にて終了することにした。本プログラムは、約20年間で、学生の国際交流のきっかけ作りとして一定の役割を果たすことができたと思う。

【スモールワールド・コーヒアワー】

2018年度、スモールワールド・コーヒアワー（以下、コーヒアワー）は、学部や学年を越えた繋がりを楽しみながらチーム形成を進め、企画運営を実施してきた。2018年度は、前期3回、後期2回、計5回のコーヒアワーを開催し、約375名の参加者があった。後述する「プレゼンテーションアワー ～世界が広がる20秒～」のイベントをコーヒアワーの特別企画として位置づけ、プレゼンテーションアワー実行委員メンバーと共同で開催した。

2018年度スモールワールド・コーヒアワー活動

開催月	テーマ	参加人数
4月	自己紹介ビンゴ	約80人
5月	折り紙・切り絵	約50人
6月	利き茶・カードゲーム	約55人
7月	プレゼンテーションアワー	約50人
11月	自己紹介ビンゴ	約60人
12月	ワールド・カフェ	約30人
2月	プレゼンテーションアワー	約50人
	計	約375人

コーヒアワーは、学生スタッフが各回につき毎週1～2回のミーティングを重ねて企画運営をしている。2018年度の学生スタッフは学部生から院生までの国内学生と留学生で構成されており、それぞれの経験や視点を活かし合いながら、参加学生の交流や相互理解を促すようなアクティビティを検討し実施した。また毎回のコーヒアワー終了後には、会場レイアウト、参加者の様子、アクティビティ、雰囲気、準備など多角的に活動を振り返る仕組みを導入し、学生が主体となって各回における学びを次回に繋げられるよう

な体制を整えた。さらに学期末、年度末には複数回の活動を包括的に振り返る時間を設けることで、学生スタッフのチームビルディングを促しながら、次の学期・年度に経験を繋ぐことができるよう支援した。

学内の国際化が推進される中で、コーヒアワーは気軽に国際学生と国内学生が出会い、交流することのできる機会を創出している。同時に、企画運営に従事する学生の企画力やコミュニケーション力を始めとする力量形成の場ともなり、彼らの学びを支援する側面も持ち合わせている。引き続き、学生たちが力を発揮できる場、成長の場となるよう、体制を整えながら実施していく。

〈学生スタッフメンバー2018年度夏アンケート:成長できたこと、身についたと思うこと抜粋〉

- ・外国の方とコミュニケーションを多少なり取れるようになった。
- ・ワードの使い方（ポスター作成やお茶危機の際のお茶の説明書で多用）
- ・とにかく人脈が広がった。もともと知らない人としゃべるのが怖かったけど、なんとなくそれに慣れてきた。
- ・リーダーシップの意識。これまで自分がリーダーシップをとることを期待される環境にいたことがあまりありませんでした。しかし、(中略)今期はチームを作ることを意識して、自分なりのリーダーシップの取り方を発見できました。

【プレゼンテーション・アワー ～世界が広がる20秒～】

2018年7月と2019年2月に、グローバルプレゼンテーション大会「プレゼンテーションアワー～世界が広がる20秒～」を開催した。本プログラムは、学生のプレゼンテーション能力を高めること、アカデミックな交流の場を創出して、分野や国籍を超えた学生間のネットワークを構築することを目的としている。2018年度は、実行委員の学生が同窓会支援事業に申請し、助成金を得ることができたため、卒業生をゲストスピーカーにプレゼンテーションを実施し、卒業生と現役生との連携を通して新たな交流が生まれる機会となった。

第8回プレゼンテーションアワー（2018年7月）では、新たな試みとして、情報通信機器を活用して、海外（アメリカ）に在住の卒業生プレゼンターに登壇い

ただき、仕事と研究の内容について共有いただいた。実行委員である学生メンバーが、時差や使用する機材の調達、接続方法等の課題を乗り越えて実現することができた。他にも3名と1組（3名）のプレゼンターが部活、観光、興味、研究について発信し、多くの参加者にとって視野を広げるきっかけとなった。第9回プレゼンテーションアワー（2019年2月）では、本学8名の卒業生たちが、本学を卒業してから経験した転職、日本企業での就業(元留学生)、海外進出等を共有いただき、現役生をはじめ多くの参加者が刺激を受けた。

本プログラムは、発表者が自分の研究、興味、活動等を発信し、聴衆者が発表を聞くことによって、視野や世界観を広げていくことを目的にしているが、それと同時に、企画・運営を進める実行委員の学生メンバーがコーディネーションやリーダーシップ能力を高める場としての教育的な機能を持っており、関わる多くの学生たちが能力を発揮し、自己成長を促す契機を提供している。

【多文化間ディスカッショングループ】

学生の適応援助、多文化理解の促進、そして多文化間における友人関係の構築を目的とした多文化間ディスカッショングループを前期に1グループ（使用言語は主に日本語）、後期に1グループ（使用言語は主に英語）開催した。専門分野や学年、国籍の異なる多様な学生がディスカッションを通して、互いの文化的背景の相違点・共通点を学び、視野を広げることのできる機会となっていた。毎回、同じメンバーで構成されるグループで実施することから、一時的な表層的交流を超えた友人関係を育むことができた学生も多く、学生生活の質の向上に繋がっているようであった。さらに、本グループは日常の学業や研究生活から離れて心を休め、リラックスできる場となっている様子も窺えた。

このディスカッショングループへの参加に際しては、事前に教員が学生一人一人と個別に面談を行い、グループの目的や内容の理解を促すとともに、学生の希望や期待との乖離がないかなどを確認している。この面談を通して、学生のグループへの主な参加動機の一つに「言語力向上」があることが明らかになった。日・英両グループともに、学生らは自身の言語力を駆使しながらディスカッションに挑戦し、多様な他者と

のコミュニケーション力を身につけていく。各回を通して言語面・コミュニケーション面に関する自分の弱みや課題を見出しながら、今後のさらなる力量形成に向けたモチベーションを高めるきっかけともなったようである。毎回のグループには、学生(大学院生)ファシリテーターを1～2名配置し、企画・運営に携わることによって、当該学生のファシリテーションスキルやコーディネーションスキルを高めるプログラムとしても機能する仕組みを構築し、実施している。

〈参加学生の感想(2018年度前期グループ参加者)〉

- ・素晴らしい機会です。
- ・心を癒された。
- ・色々な国の人から彼らの国についてたくさんのことを学ぶことができたとともに、とても良い気分転換になった。
- ・I especially liked hearing about different experiences from different countries. I find very enjoyable sharing different ways to similar things; I think it is very enriching
- ・(ディスカッショングループのことを)周りに知らなかった人が多かったのも、もっと認知度が上がると良いと思いました。

【名古屋大学グローバルネットワーク(国際交流グループ)活動報告】

名古屋大学グローバルネットワークとは、国際教育交流センターが顧問や支援する国際交流グループの連携を促すことを目的に2009年から存在している学内ネットワークである。現在、5グループ(スモールワールド・コーヒーアワー、プレゼンテーションアワー、ヘルプデスク、異文化交流サークル ACE、名古屋大学

留学生会 NUFSA) が共同で活動報告書を作成している。

2018年度は、アドバイジング部門が中心となり、各グループに所属する学生と担当教職員と共同で年間活動の報告書を発行した。報告書は、アドバイジング部門のホームページを参照されたい。(http://acs.iee.nagoya-u.ac.jp/program/introduction.html)

名古屋大学グローバルネットワークの国際交流活動についてより多くの学生に周知し、参加を促すことができるよう、アドバイジング部門が中心になってリーフレットを発行しており、オリエンテーション、ガイダンス等で配布している。また、名古屋大学グローバルネットワークが連携して、各グループの学生メンバーのリクルートを目的とした合同説明会を実施するなど、ネットワークを活かした企画も見られるようになった。このような取り組みは、学生が主体となって互いの国際交流活動から学び、活動の質を向上させたり活動参加へのモチベーションを高めたりするきっかけともなっている。

【JENESYS 2018 台湾訪日団との学生交流会「One Step for the Future.」】

有志学生5名が中心となり、外務省の対日理解促進交流プログラム「JENESYS」による台湾からの訪日団(学生28名、引率者2名)と名古屋大学生(22名、国際学生を含む)の交流会を企画実施し、アドバイジング部門教員がその支援を行った。企画当日は、名古屋大学生による名古屋大学紹介プレゼンテーション、互いを知り、緊張をほぐす自己紹介アクティビティ、絞り染めの技法を取り入れたうちわ作り体験、「10年後の私たち」についてのディスカッションを実施し、訪日団と名古屋大学生が互いを知り、関係性を築きき

2018年度 多文化間ディスカッショングループ

2018年度前期	
日本語グループ	2018年5月16日～7月4日 毎週水曜日4限(全8回) 参加人数: 8名 ファシリテーター: 3名(教員2名, 学生1名) 主なテーマ: 日本の文化, 各国の文化, 名古屋, スポーツ, 音楽, 結婚, 少子高齢化, 将来のこと, カルチャーショック等
2018年度後期	
英語グループ	2018年11月16日～2019年1月11日 毎週金曜日3限(全6回) 参加人数: 14名 ファシリテーター3名(教員1名, 学生2名) 主なテーマ: 日本の文化, 食べ物, 名古屋, 家族, 恋愛, 音楽, 祭り, 映画, 冬休み, ストレス発散法, 進路, 将来の夢等

かけとなった。プログラム全体を通して参加者の使用言語の違いに配慮し、司会進行は日本語と中国語、投影資料は日本語と英語を用いるなどの工夫を行った。また、有志学生チームには、院生から学部生までの国内・国際学生が参加した。この5名は、企画を練り上げる過程で互いへの理解を深め、それぞれの持ち味やアイデアを生かし合って企画を実現させた。

【国際交流セミナー：国際交流の理論を学び体験しよう】

2018年度後期に全3回の国際交流セミナーを実施し、延べ22名が参加した。このセミナーの目的は、国際交流に関連する理論を学ぶことで日々の国際交流活動の質を高めるための知識を得ること、そして国際交流に携わる学生間の横のつながりを創出し、強化することであった。

「国際交流の理論を学び体験しよう」と題して実施した同セミナーでは、文化・異文化、異文化感受性に関する理論を紹介し、それらの理解を深めるためのアクティビティやディスカッションを実施した。また、参加者が関わっている（もしくは、関わりたいと思っている）日々の国際交流活動について、国際交流に対する思いや考えについて振り返り、参加者同士でシェアする中で、自他に対する気づきを高めていった。

【国際交流コーディネーター育成ワークショップ】

2019年2月8日に、立命館大学国際化推進機構の筆内美砂氏を講師として招き、「国際交流コーディネーター育成ワークショップ（2時間）」を開催した。同ワークショップのテーマは「学生力で変化を起こそう！名古屋大学の国際交流と学びあい」とした。参加者は16名であった。

同ワークショップでは、筆内氏による国際交流に関連する理論的枠組みや自身のこれまでの異文化体験の紹介によりテーマへの理解を深めた。また、学生自身が日々取り組んでいる国際交流活動の現状や課題を多角的に振り返り、参加者同士で共有することで、解決策を模索したり、新しいアイデアを得たりした。

参加者には学部1年から博士後期課程までの国内・国際学生が含まれていたため、ワークショップは日英両言語を使用して実施された。特徴の異なる国際交流活動を運営している学生が、国籍や学年を超えて集結し、対等な立場で議論し互いへの理解を深める貴重な学びの機会となった。

【学生組織との連携】

・異文化交流サークル ACE：異文化交流サークル ACE (Action group for Cross-cultural Exchange) は、様々なプログラムで名古屋大学に在学する留学生の生活のサポートや、留学生と一般学生の交流を促進するためのイベントの企画・運営を行う学生団体である。アドバイジング部門の教員が顧問を担当し、学生主体の活動状況を見守りながら、必要に応じて活動に対する助言、企画するイベントが多くに学生に周知されるよう情報提供に協力している。学部2年生がサークルの代表や副代表を担い、中心になって活動を進めているが、大学院生などのメンバーも企画に携われるよう柔軟な運営体制を作り、より気軽に学生が交流できる機会の創出など、活動内容の更なる充実化を目指して尽力している。

・名古屋大学留学生会 (NUFSA)：NUFSA では、全学の留学生を対象とした、留学生のためのバザー（年2回）やウェルカムパーティーの他、様々なイベントを行っている。NUFSA は名古屋大学留学生後援会から毎年補助金を得ており、名古屋大学の留学生にとって有益な活動が提供できるよう取り組んでいる。2018年度は、NUFSA メンバーのチームビルディングや認知度を高めるために、NUFSA トレーナーを作り、活用した。特に、「TANDEM(言語パートナー)」、「CINEMA CLUB」、「NUFSA ライブミュージックセッション」等の交流プログラムを充実させた。さらに、サンガレン・シンポジウムと連携し、学生を対象にした説明会を開催した。2018年度も多様な活動を充実させるとともに、広報活動にも力を入れ、多くの留学生たちにとって身近な存在になれるよう尽力した。

・愛知留学生会後援会：1960年代に設立した任意団体で、50年以上にわたって愛知留学生会と連携して支援活動を行っており、昨年度からは、不測の病気や事故で経済的困難に陥った留学生のための緊急援助事業に限定して活動している。緊急援助金の申請受付や、審査および支給や会計等を2012年度から田中が担当し、2018年度は合計8件の支給をした。

・中国留学生学友会：今年度は学友会の代表者たちとの連絡が途切れたため、年度末に状況を確認し、来年度打合せの機会を持つこととなった。

・名古屋大学イスラム文化会（ICANU）：当会が主催するイスラム文化紹介の行事や毎週金曜日に行なう集団礼拝について、相談を受け、大学との連携調整に協力した。ラマダン月に、非ムスリムに断食の説明をしたり、日没後の食事を共にしたりする集会も昨年に引き続いて2回目を行い、文化交流のよい機会となった。

・アフリカ学生会：昨年度設立された名古屋大学アフリカ学生会が同窓会の助成金を受給し、「アフリカデー」行事を行った。部門で行事を共催し、司会者や演奏者への謝金への補助、準備や当日進行の支援を行った。

・韓国学生会：本学に多く在籍する韓国出身の留学生たちが、従来グループを作って活動しており、地域の国際理解教育にも貢献しているが、大学の公認サークルになるための相談があった。今後規約を定めて、よりまとまりのある組織として活動していく可能性がある。

（3）学生個別教育（相談）および診療

相談室での相談活動を「個別教育」と位置づけ、名古屋大学の留学生に限らず、在學生や教職員、他大学へ進学した学生、地域構成員などの相談にも可能な限り対応した。また、保健管理室において、精神科医による投薬を伴う精神科診療も行った。相談対応は原則予約制としたが、予約のない場合でも可能な範囲で適宜相談に対応した。

【相談件数】

2018年度の相談内容別の相談件数は、図1の通りである。参考までに2016、2017年度の件数も示している。一度の相談における内容が複数にまたがっている場合も少なくないが、その場合は主たる相談内容を選択している。そのため、以下の件数は相談の実回数に

相当する。直接の面談による相談に加え、電話やメールによる相談も、対応におよそ30分以上かかったものは件数に含めている。また、以下の図1の相談件数にはキャリア支援室の件数は含まれていない。

2016年度（952件）から2017年度（2068件）では、約2.17倍と著しい相談件数の増加がみられていたが、2018年度（2083件）は2017年度とほぼ横ばいの相談件数となっている。2017年度において、すでに相談枠は飽和しており、新規相談希望者には1週間以上の待機期間が生じてしまっていたが、2018年度においても、その状況は続いており、現在の人員配置では、これ以上の相談を受けることが難しい状態となっている。対策として、経費削減により保留となっている教員ポスト1名の運用再開を引き続き、要望するが、人員が増えないのであれば、1件あたりの相談時間を短縮させるなど、質を低下させてでも、件数増加に対応する必要が生じるであろう。

相談に訪れた合計人数は242人（日本人学生や教職員など含む）で、留学生人数は192人であった。2018年11月1日時点では、名古屋大学には2204人の留学生が在籍しており、この人数を母数と仮定すると、在籍留学生のおよそ8.7%、すなわち11.5人に1人が当部門へ相談に訪れていることとなる。

2017年度および2018年度の相談内容別の件数を図2に示す。2018年度は「心身不調・メンタル」842件、「国際交流・学生活動」428件、「生活・異文化適応」194件の順に件数が多い。「心身不調・メンタル」は増加し続けており、2018年度においては、全相談のおよそ40%を占めている。2017年度において、著しく相談件数が増加したことを受けて、教育交流部門の国際化推進担当教員との役割分担を図った。結果として、「指導教員・研究室」「日本語・学業・研究」「在留」の相談件

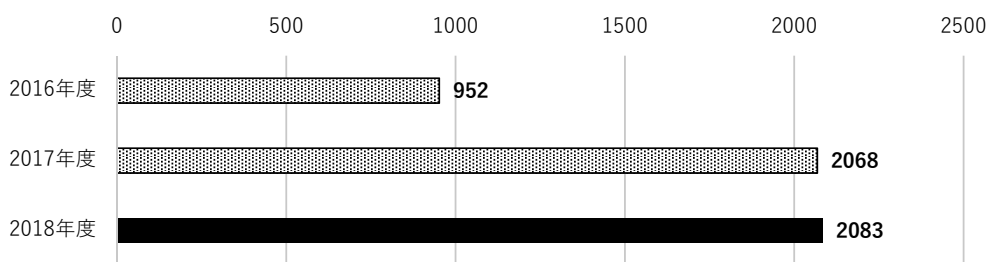


図1：年度別相談総件数

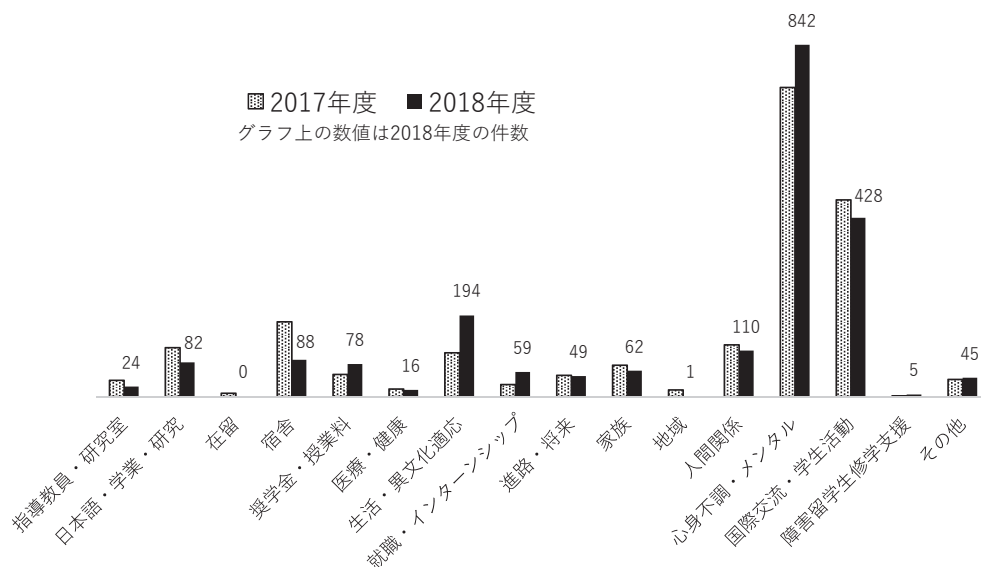


図2： 相談内容別件数

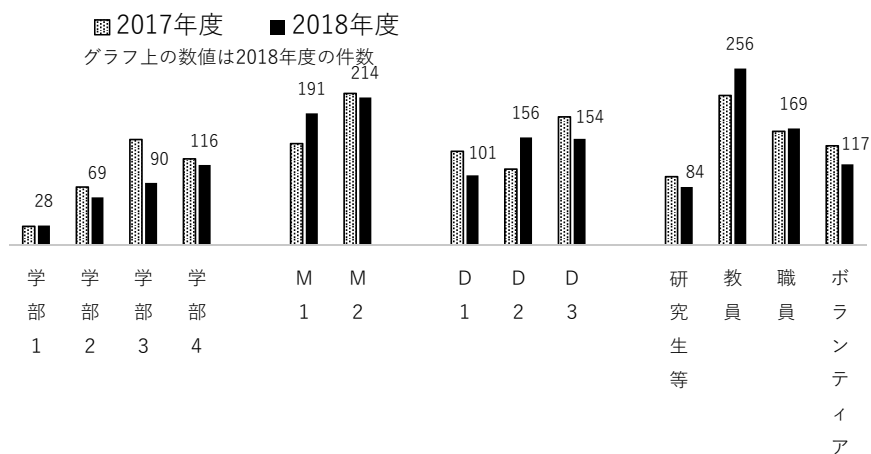


図3-1： 学年・所属別相談件数

数は減少しており、アドバイジング部門所属教員の専門性をより活かすことができた。

2017年度および2018年度の学年・所属別の相談件数を図3-1に示す。年次が上がるにつれて、相談件数が増加する傾向が、2017年度と同様にみられている。また、教員からの相談も増加傾向にあり、当部門が担っている留学生対応のアドバイザーとしての役割が増えつつある。

所属別に在籍している留学生数（2018年11月1日時点）で2018年度の相談件数を割ると（すなわち、在籍留学生1名あたりの相談件数）、学部学生：修士課程：博士課程 = 1.16：0.54：0.66となっている（図3-2）。学部

学生の利用が多く、大学院生の利用が少ない傾向は、2017年度と同様である。

図4-1には、2017年度および2018年度の部局別の相談件数を示す。2017年度に比べて2018年度は、人文＋国言（24%増）、教育（33%増）、法（45%増）、経済（27%増）、医（36%増）、国際開発（24%増）の各学部・研究科にて相談件数が増加し、情報（58%減）、理（29%減）、工（17%減）、多元数理（52%減）、環境（18%減）の各学部・研究科では相談件数が減少した。

図4-2に、部局別の在籍留学生一人当たりの相談件数を示す。各部局の相談件数を、2018年11月1日時点での各部局在籍留学生数で割ったものである。全体平

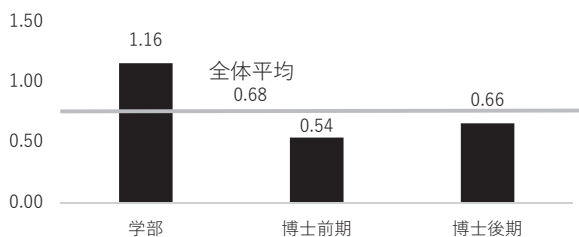


図3-2： 所属区分別 在籍留学生一人当たり相談件数

均に比べて、人文+国言、教育、理、国際開発、多元数理の各学部・研究科では相談利用が多く、法、経済、情報、工、環境の各学部・研究科では、平均に比べて相談利用が少ない。

【相談内容】

様々な相談の詳細やその背景については、相談者のプライバシー保護の観点から、報告することができない例が多いが、今年度の特徴として以下を報告し、今後の活動に活かしていきたい。

■指導教員・研究室

研究室での人間関係について、疑問や悩みが寄せられた。所属部局の国際化推進教員や学内外関連機関と

適宜協力しながら、疑問の払拭や問題の解決にあたった。ハラスメントに該当すると考えられた場合ハラスメント相談センターと連携して支援に当たるケースもあった。また、留学生の指導教員等から学生対応について相談を受けることもあった。

学生へは、疑問に感じるものがあつたら問題化しないうちに相談できる場所があることを、オリエンテーションや日々の活動の中で周知し、教員たちとは、教員が自ずと持つ強い立場を理解し、学生に対する言動に自覚的になる必要性を共有している。

■日本語・学業・研究

指導の受け方についての相談、教員との面会約束の取り方、論文指導の受け方等、出身国などで慣れて来た方法がそのまま通用しないこともあり、一緒に考えた。

■在留

在留については留学生の所属部局において相談に対応する環境ができているため、本部門への相談はなくなった。

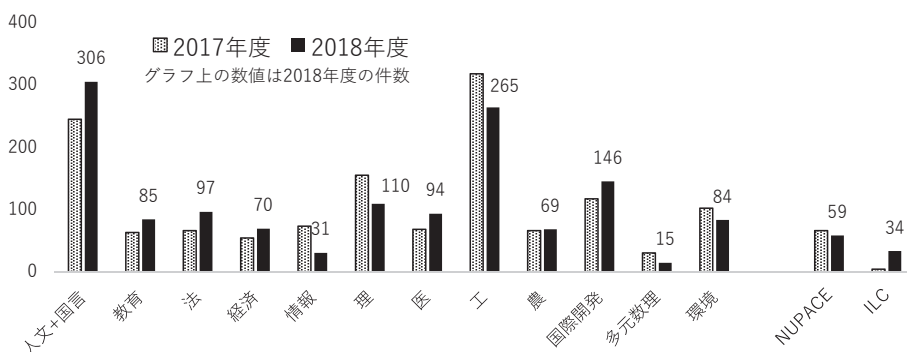


図4-1： 部局別相談件数

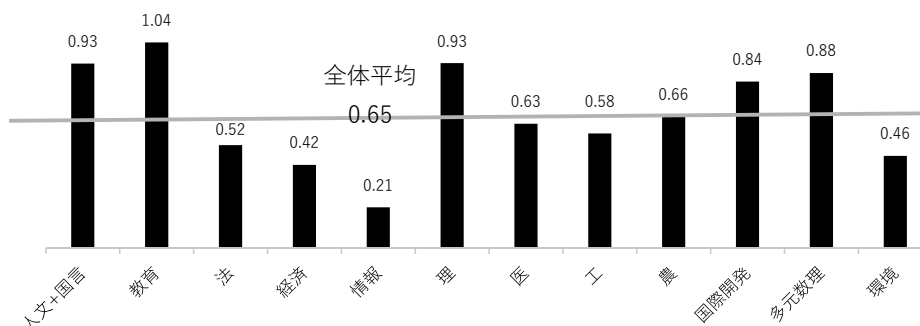


図4-2： 部局別在籍留学生一人当たり相談件数

■ 宿舎

大幸地区に建設中の国際学生会館の設計や運営についての相談に、関係部署と協力しながら対応した。来年度の開館に向けて具体的な打合せが多く、これまでの経験からできるだけ貢献できるように努力した。また、口頭でのコミュニケーションの誤解や契約書内容についての理解不足等から、退去時の清算について不動産会社と問題になったケースがあった。教育交流部門との連携によって、宿舎に関する相談は基本的に各部局で対応することになったため、本部門で対応する案件は少なくなった。引っ越しオリエンテーションも教育交流部門と協力して行なうようになった。

■ 医療・健康

持病のため薬剤を継続する必要がある、日本国内での処方希望する留学生において、状況を確認し、学外医療機関宛の診療情報提供書を作成した。

名古屋大学保健管理室の医師や看護師との連携のもと、「留学生のための健康相談室」を実施した。日本で医療に掛かる際の基礎知識や、健康に日常生活を送ることができるよう季節ごとに異なる生活上の注意点などについても情報提供した。同時に医師や看護師に気軽に相談ができるよう個別相談会も行なった。

■ 生活・異文化適応

インターネット契約勧誘やアンケートへの回答依頼という名目での訪問に応じて、問題になったケースが複数あった。個別案件についての対応とともに、学生たちには、オリエンテーションの場やメールによって注意喚をした。

同一人物による多人数学生に対してのセクシュアルハラスメントの事案があった。当事者および関係者等と協力して対応し、本部門としても、注意喚起の方法や内容等を検討して更新した。

■ 進路

研究の方向性を変えるほうがよいか、継続して研究生活を続けるべきか、休学や退学をしたほうがよいか、など進路に関する相談があった。就職の可能性についてはキャリア支援室と連携して対応した。

■ 家族

配偶者の生活や仕事について、来日前に想像してい

たより状況が厳しく、経済的にも非常に困難を抱えているという相談が複数あった。

■ 地域

地域の組織や個人から、留学生と交流したい、留学生を招待したい、または留学生に日本文化を伝えたい、という希望が多く寄せられる。教育機関・公的機関からの依頼については地域連携・貢献の一環として部門で対応した（4 - (1) 参照）。

■ 人間関係

特定の国・地域に関する留学生による発言が差別的と捉えられ、様々な問題が生じたケースがあった。関係の学生から話を聞いたり、解決策をともに考えたりした。アルバイト先でのハラスメント被害について、関係機関と協力して解決したケースもあった。

■ 心身不調・メンタル

精神的な不調により、無断で国外へ渡航してしまったケースや、母国に帰国して治療を受けなければならなくなったケースがあり、診療や環境調整を行った。また近隣の精神科医療機関は日本語でしか診察対応をしてもらえないため、投薬による治療を要する英語話者の留学生のほとんどは学内保健管理室で診察・処方を行っている。

■ 国際交流学生グループ

名古屋大学留学生会（NUFSA）、名古屋大学イスラム文化会（ICANU）、異文化交流サークル（ACE）、アフリカ学生会、また今年度は新たに韓国学生会からの相談があった。会が主催する行事についての相談、教室や運動施設利用にあたっての申請や連絡、コミュニケーションや日々の礼拝についてなどである。その他、名古屋大学で活躍している様々な国際交流活動グループからの相談に応じた。学生グループの活動を通して名古屋大学の国際化に貢献した学生たちを、国際教育交流センター長顕彰や総長顕彰に推薦した。

■ 交流活動

パートナーシップ、ホームステイ、コーヒーアワー、ワークショップ等の参加登録などで相談室を訪れる学生たちもいる。その機会に、交流や留学、外国語学習についての相談を受けることもある。様々な交流プログ

ラムを紹介したり、外国語を臆することなく積極的に使って実力をつけるよう助言したりしている。さらに部門として、ドイツ語の会の開催支援を継続的に行っている。

■障害学生修学支援

自閉症スペクトラム症や注意欠陥・多動性障害などの発達障害があり、留学する学生が増加してきている。医療面では、必要な治療が継続できるよう適宜学内外の医療機関を紹介するとともに、修学面では、障害学生支援室と連携しながら、必要な合理的配慮の提供などを検討した。

■その他

税金・国民年金掛け金等について質問や相談が寄せられることが多くあったが、内容が複雑、かつ多岐に渡るため、対応に苦慮するとともに、十分な情報提供ができていないという状況があった。市民としての権利や義務に関わり、学生にとっても重要な事項であるため、2016年度から行っている「留学生のための確定申告セミナー」を2018年度も引き続き、名古屋税理士会の協力の元、実施した。税金や確定申告についての説明を行うとともに、税理士による個別相談会を行った。

(4) 授業

前期に、G30教養科目、全学教養科目として「Exploration of Japan: From the Outside Looking Inside (留学生と日本)」を開講した(和田・川平)。後期の全学教養科目「留学生と日本—異文化を通しての日本理解—」は国際機構教員チーム(浮葉、高木、和田)により開講した。

また、2017年度に引き続き、総合保健体育科学センターと共同で、後期にG30教養科目「Health and Sports」(酒井)を担当し、不眠への対応などの精神衛生教育を行い、授業を通じて精神的不調の予防につとめた。受講者の個別相談希望もあり、当部門との顔の見える関係性構築にも役立っている。

3. 大学国際化への貢献

(1) 民間留学生寮入居推薦者選考

留学生のために寮を提供している会社や団体が複数

あり、入居希望者の書類選考を教育交流部門の教員や学生支援課の担当者とともにいった。宿舍提供の趣旨や提供者の希望と申請者の条件が合致するよう、また、提供者には本学の学生の状況を理解いただけるよう、学生支援課を通してコミュニケーションをとりながら、選考にあたっている。本学からの推薦者の一部に対しては、提供団体で面接を受ける前に、本学で面接練習を行った。

(2) 国際交流会館レジデント・アシスタント研修

インターナショナル東山・山手・妙見と留学生会館、および猪高宿舎には合計約20名のレジデント・アシスタント(RA)学生がおり、入居者の生活支援や会館運営の補助を行っている。2018年度も引き続き、RAを対象とした連絡会・研修を年間6回実施。情報共有の場としてオフィス・アワーも実施した。更に、国際交流会館の体制、およびRAの活動や役割について学び、改めて検討する機会を設けるため、一橋大学より教員1名と代表RA2名を招聘し、合同研修会を行なった。一橋大学の宿舎やRA体制および年間を通じた活動について知るためのセミナーを受け、その後、名古屋大学におけるRA活動の活性化を図るべく今後の課題を洗い出すためのワークショップを行なった。

加えて、2018年度も、名古屋大学災害対策室の専門家に協力を依頼し、防災セミナーを実施した。後日、各宿舎でRA主催の防災交流会を単独で実施、もしくは交流イベント実施時に、防災に関する情報提供を行い、渡日後の学生に日本における防災について学ぶ機会を提供した。さらに、医師による救命救急講座も実施し、いざという時に備えて、けが人や病人対応の心構えを学び、心肺蘇生法について学んだ。

名古屋大学では、毎学期約600名の新規渡日留学生が国際交流会館に滞在している。来日直後の学生が滞在していることもあり、宿舎での支援は、留学生の孤立を防ぎ、適応を促す上でも重要である。その中で、RAは、国際交流会館において新規渡日の留学生と生活を共にし、生活適応の支援をするという重要な役割を担っている。今後も引き続き、RAの存在を学内に広く伝えるとともに、活動内容の明確化かつ充実化を目指したい。留学生だけでなくRA学生にとっても貴重な国際交流経験が得られる場となるよう教育的価値を高めていきたいと考える。

(3) 国際学生寮新設への協力・寮内教育の検討

2019年度から新たな国際学生寮「インターナショナルレジデンス大幸」が開館する予定であるため、現場の意見が反映されるよう、学内での検討会や運営委託業者との会議に出席して関係部署との調整を行った。

(4) 食の多様性への対応

近年大学生協と協力して、生協食堂におけるハラル食やベジタリアン食の充実化をはかってきたが、食の多様性により対応できるよう、生協および留学生組織の代表者たちと意見交換会を持った。話し合いの結果を今後の具体策に繋げるようになった。

4. 地域社会と留学生の交流への貢献

(1) 国際理解教育への留学生派遣

合計16の地域組織等主催行事について、連携・協力した。アドバイジング部門を通して派遣した留学生数

は8名であり、それ以外の行事は、本部門に提出される後援依頼書を検討して条件や内容を調整した後、直接催行者に応募する形をとった。主催者が希望する参加留学生の人数の合計は119名であった。民間会社が学校等に留学生を紹介する事業に参入してきており、会社関係からの依頼もあった。

長年留学生を対象とした日帰り交流旅行等を企画運営していた地域ボランティアの会「名古屋を明るくする会」は2018年度については企画を行わなかった。

(2) ホームステイ

アドバイジング部門では、留学生と地域とを結ぶホームステイ事業に取り組んでいる。2017年度からは宿泊を伴わない「ホームビジット」プログラムも取り入れて、年間1回の主催プログラムと8回の協力プログラムに合計142名の留学生が参加した。(詳細については本年報、事業報告編の「地球家族プログラム」を参照)

平成30(2018)年度 地域社会と留学生の交流(国際教育交流センターによる地域への連携・貢献活動)

No.	イベント年月日	行事名	依頼団体 / 依頼者	希望派遣数	備考
1	2018/5/13	春の国際交流会	揚輝荘の会	—	催行者へ直接応募
2	2018/6/16	第1回雅百花杯	みやび百花杯実行委員会	—	催行者へ直接応募
3	2018/6/16	国際ヨガDAY	国際ヨガDAY 東海実行委員会	—	催行者へ直接応募
4	2018/6/2・6/3・6/30・7/1	みえ国際ウィーク	鈴鹿サーキット	—	催行者へ直接応募
5	2018/8/6-9	高山グローバルサマーフェスタ	愛知県立旭丘高等学校	—	催行者へ直接応募
6	2018/8/9-14・8/11-16・8/18-23・8/19-24・8/29-9/5	あしなが奨学生のつどい(サマーキャンプ)	Ashinaga あしなが育英会	—	催行者へ直接応募
7	2018/8/9-12・8/24-27	イングリッシュキャンプ	Interac(愛知県教育委員会)	—	催行者へ直接応募
8	2018/10/30・11/6・2019/1/22	韓国についての学習	愛知県立旭丘高等学校	5×3	催行者へ直接応募
9	2018/9/29・10/27・11/10・11/17	イングリッシュ1day ツアー	Interac(愛知県教育委員会)	10×4	催行者へ直接応募
10	2018/8/5	長唄と笛の夕べ 2018	名古屋市立津賀田中学校和楽器部	—	催行者へ直接応募
11	2018/10/29	グローバルカフェ	豊田南高校	9	催行者へ直接応募
12	2018/10/21	小牧山英語ガイドツアー	小牧通訳ボランティア会	10	催行者へ直接応募
13	2018/12/22-25	イングリッシュキャンプ	Interac(愛知県教育委員会)	15	催行者へ直接応募
14	2019/1/20	国際交流デー	大府市国際交流協会	10	催行者へ直接応募
15	2019/1/25	国際交流会	伊勝小学校	8	中国3名、台湾2名、韓国1名、ベトナム1名、ベネズエラ1名
16	2019/2/28	異文化交流プログラム	トモノカイ(皇学館中学校)	8	催行者へ直接応募

行事数：16、依頼団体数：14、派遣留学生数：延べ8名(催行者への直接応募を除く)
参加者の出身国・地域：5ヵ国・地域(催行者への直接応募を除く)

(3) 地域連絡会・留学生のためのバザー

2018年度も地域連絡会を年に4回開催し、名古屋大学留学生会 (NUFSA)、異文化交流サークル ACE、YWCA、ともだち会、地域のボランティアの方々と、留学生のためのバザーを計画し、4月と9月に開催した。1986年10月に始まった留学生のためのバザーは、2018年度で32年目に突入した。現在も、渡日直後やアパートで生活を始めた留学生にとって生活用品を安い価格で購入することのできる機会であり、変わらず重宝されている。年々、バザーの提供品が減少傾向にあり、どのように提供品を募っていくか課題となっている。留学生のためのバザーは、品物を購入する学生たちだけがメリットを得る場ではなく、バザー運営に関わる学生たちにとって、多くの学びの場となっている。特に、名古屋大学留学生会 (NUFSA) と異文化交流サークル ACE が主催者として、共同運営しているため、意思決定方法など、事前と事後の会議 (地域連絡会) で確認しあい、関係構築を深める場面があった。

さらに、物品提供や配達において毎年多大なご協力をいただいている近藤産興株式会社の社長近藤成章氏が、愛知県国際交流協会により「愛知県国際交流推進功労者」として選出され、授賞した。

(4) 警察との連携

名古屋大学が位置する千種区の警察署には、従来様々な形で学生たちへの安全指導に協力してもらっており、特に新入留学生が、日本は安全であると過度に思いこんで犯罪にまきこまれることがないように、これまでの経験も参考にしながらオリエンテーションなどで指導している。また学生集会などが他人によって思わぬ方向に利用されないよう、地域の安全を守るためにも、学生グループとも連携協力している。

愛知県警察本部からは多言語による民間通訳人候補者の紹介を依頼されることが多い。地域貢献の面からだけでなく、留学生の経済面や研究面に役立つ方向で適任者を紹介するようにしているが、英語プログラムも多くなった現在、日本語と母語両方が通訳レベルまで堪能な学生は少ない。今後の多文化社会を考えると、母語→英語→日本語 など、2名体制による通訳が有効ではないか、などの提案もしている。

5. 研究・研修

(1) 著書・論文・報告

・田中京子「複数国留学経験者にとっての日本留学の成果」～ラテンアメリカ出身元留学生への聞き取り調査から～『留学生交流・指導研究』21号、国立大学留学生指導研究協議会、2018

・川平英里・星野晶成「国際教育従事者の人材育成とネットワーク構築－BRIDGE Institute の取組と挑戦」『留学交流』2018年8月号 Vol.89, pp.34-42, 2018

(2) 学会活動

・国立大学法人留学生指導研究協議会 (COISAN) 編集委員 (和田)

・国立大学法人留学生指導研究協議会 (COISAN) 副代表幹事 (田中)

(3) 研究活動・FD/SD 活動

〈主催研究会・研修会〉

日時：2018年6月12日

場所：CALE フォーラム (国際棟2階)

タイトル：性的個性と学生支援～多様な性について考える～

講師：中澤未美子 (名古屋大学ハラスメント相談センター)

参加人数：約40名

日時：2018年11月25日

場所：ES 総合館1階会議室

タイトル：国際的多様性とは？～名古屋大学多様性リテラシー研修～

講師：カンダボダ パラバート ブッディカ (立命館大学)

参加人数：約35名

日時：2018年12月21日 (男女共同参画センター、障害学生支援室、ハラスメント相談センターと共同主催)

場所：アジア法交流館2階ホール

タイトル：多様性と生産性～名古屋大学多様性リテラシー研修～

基調講演、パネルディスカッションなど

参加人数：約80名

〈発表・講師等〉

- ・2019年2月1日 国立大学法人留学生指導研究協議会 兼 第50回大阪大学留学生教育・支援協議会「留学生の多面的な支援」コーディネーター（田中）
- ・2018年9月5日～7日 RECSIE（国際教育研究コンソーシアム）主催「国際教育にかかわる教職員向け夏期研修」招聘講師（川平）

〈参加〉

- ・2018年5月18日 JAFSA 第一回初任者研修「基礎から学ぶ国際教育交流」参加（川平）
- ・2018年5月22日 異文化間教育学会 年次大会参加（田中）
- ・2018年6月3日 日本ラテンアメリカ学会定期大会参加（田中）
- ・2018年6月26日 2018年度国立大学法人留学生センター留学生指導担当研究協議会参加（田中，酒井，和田）
- ・2018年8月9日-11日 異文化コミュニケーション学会第33回年次大会参加（川平）
- ・2018年10月5～6日 日本精神病理学会第41回大会参加（酒井，和田）
- ・2018年11月18日 一般社団法人 日本摂食障害協会主催『摂食障害の理解とサポート』参加（和田）
- ・2018年11月19日 こころの絆創膏セミナー2018『社会とのつながりを模索する学生への支援－情報意見交換会』参加（和田）
- ・2018年12月2日 日本ラテンアメリカ学会中部日本部会参加（田中）
- ・2018年12月20日 名古屋大学高等教育センター 第163回客員教授セミナー「大学における国際交流業務の役割と担当職員のキャリアパス」参加（川平）
- ・2019年1月26～27日 2018～2019精神病理コロック参加（和田）
- ・2019年2月1日 平成30年度国立大学法人留学生指導研究協議会 兼：第50回大阪大学留学生教育・支援協議会参加（田中，酒井，川平）
- ・2019年2月2日 国立大学法人留学生指導研究協議会（COISAN）第7回留学生交流・指導研究会参加（田中，酒井，和田，川平）
- ・2019年2月23～24日 ワークショップ『発達障害の精神病理Ⅱ』参加（酒井）
- ・東山症例検討会（保健管理室，毎月開催）

- ・東山グループスーパービジョン（ケース検討）（毎月第2月曜日）
- ・海外文献抄読会参加（2018年10月）（酒井，和田）

（4）研究助成

- ・日本学術振興会科学研究費補助金 若手研究(B)「大学院留学生のための多文化間調整能力を高めるための教育プログラムの開発」2014年～2018年（高木）
- ・日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(B)「国際教育プログラムの開発・普及・評価サイクルの構築：高大連携による学びの実施化」2017年～2020年，（研究代表：堀江未来・立命館大学，研究分担者：高木，研究協力者：川平）
- ・日本学術振興会科学研究費補助金 国際共同研究強化(B)「日本メキシコ双方向の長期的留学成果～政府文化外交50年の分析」2018年10月～2023年3月（研究代表者：田中）
- ・日本学術振興会科学研究費補助金 研究活動スタート支援「正課外の国際交流における多文化間共修の意義：多様な他者と協働する力の育成に向けて」2018年4月～2020年3月（研究代表者：川平）
- ・日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C)「留学生のメンタルヘルスに関する包括的な研究」2015年4月～2019年3月（研究代表者：京都大学 阪上優，研究分担者：酒井）
- ・日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C)「ハラスメント問題に対応するソーシャルワーカー養成のための集学的研究」（研究代表者：山形大学 中澤 未美子，研究分担者：和田）

6. 社会連携

国際交流関係財団等の委員

- ・愛知留学生会後援会 常任理事，緊急援助金担当（田中）
- ・愛知県国際交流協会 評議員（田中）
- ・大幸財団 奨学金選考委員（田中）

7. おわりに

2018年度は，多様な学生の共修の推進を目標としながら日々の業務を進める中で，組織再編による連携体制構築や，さらなる組織再編への最適な対応に尽力し

た一年であった。

教員体制では、高木が2018年9月末に育児休暇を終えて職場復帰し、高木の代替教員として2017年12月から業務にあたっていた川平は、2018年9月末からは学術専門職として、引き続きアドバイジング部門において留学生のキャリア支援を始め共修の推進に貢献した。一方、酒井は任期のある教員ポストについていたが、審査の結果、任期のないものになり、留学生支援が長期的展望から行なえる大きな一要素となった。しかしながら、キャリア支援教員ポストがなくなったことと、1教員ポストが依然として凍結されていることから、部門教員は4ポストと、2018年度限りの学術専

門職1ポストとなっており、それぞれの教員の業務量は限界を超えている。

事務体制では、年度途中の予期せぬ退職等による環境の変化はあったが、経験値の高いスタッフたちを中心として協力体制を作り、業務量と業務内容の調整をしながら仕事を円滑に進めた。

今後も各教職員がそれぞれの専門性を活かして連携しながら、学生支援及び教育実践の質を維持・向上させることを目指したい。また、様々な文化や背景を持つすべての教職員たちにとって働きやすい環境を整えることは部門としても大学としても重要な課題であり、協力体制をとりながら取り組んでいきたい。